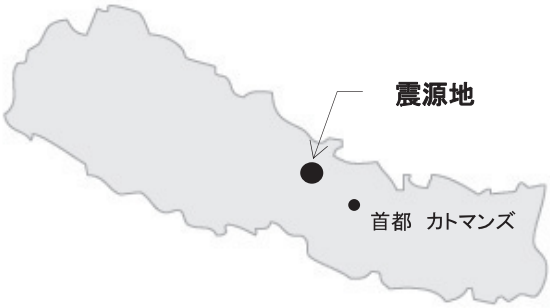
～ 特別企画 ～

ネパール連邦民主共和国における大地震
―そのとき現地では―

国際協力部教官
内　山　　淳

第１　はじめに



2015 年４月 25 日（土）午前 11 時 56 分（現地時間），ネパールの首都カトマンズから北西に約 77 キロメートル[1] を震源地（深さ 18 キロメートル）とするマグニチュード 7.8[2] の地震（本震）が発生した[3]。

ネパールの国土には，インド・プレートとユーラシア・プレートとの衝突によって形成されたヒマラヤ山脈がそびえ，その中には世界最高峰のエベレスト（ネパール名「サガルマータ」）も含まれている。今なお，その造山活動が続いているため，ネパールでは，古くから，幾度も大地震に見舞われてきた[4]。

今回の地震では，カトマンズ市内を始めとして，ネパール各地で甚大な被害が生じた。

被災による衝撃と悲しみは想像を絶しており，そのことを簡潔な文面で著わしたネパール元検事総長からのメール（別添１）を拝見すると，思わず目頭が熱くなる。

---

[1] 直線距離で 77km は，東京・箱根間又は大阪・姫路間に相当。

[2] 1995 年の「阪神・淡路大震災」は M7.3。2011 年の「東日本大震災」は M9.0。

[3] アメリカ地質調査所（USGS）等の発表による。
本震直後の同日午後零時 30 分（現地時間）にも M6.6，翌 26 日午後零時 54 分（現地時間）にも M6.7 の余震が発生。本稿執筆時点での最大余震は，翌５月 12 日午後零時 50 分（現地時間）の M7.3。

[4] 記録が残っている中で過去最大とされるのは，1934 年の「ビハール・ネパール地震」（M8.1）。この他にも，カトマンズに大きな被害をもたらした地震としては，1255 年（推定 M8.0），1833 年（推定 M7.9）の各地震が知られている。

地震によって亡くなられた方々は，ネパール国内だけでも 8500 名以上に上るとされている[5]。また，人命のみならず，世界遺産に登録されていたカトマンズ盆地内の歴史的建造物が数多く崩壊するなど，文化的な喪失も大きい[6]。

司法関係についてみても，最高裁判所や地方裁判所では，建物壁面に亀裂が入ったため，以後は使用できなくなるなど，各所で被害が発生している（写真後掲）。

今回の地震で崩れ落ちた建築物の多くは，耐震性に乏しいレンガ造の建物であり，そのことも被害拡大の一因とされている[7]。この点，ネパールでは，レンガ造などの崩壊しやすい建物が広まらないようにするため，1994 年に新建物法（New Building Codes）を導入したが，今回の被害を防ぐことはできなかった[8]。

今回の地震における被害状況は，すでに各種報道やインターネット等で明らかにされており，本稿は，被害状況全般について詳報することを目的とするものではないため，これ以上の言及は割愛したい。

本稿では，今回の地震での被害のうち，現地の長期派遣専門家に関わる事象に焦点を当て，地震発生直後期における現場の実情をお伝えすることを主な目的としている。

そのために最も有効なのは，現地に常駐する長期派遣専門家からの「生」のメールや写真を用いることであると考えた。また，そのようなメールや写真は，今後，法整備支援に関わる法曹や国際協力関係者にとっても，貴重な財産になると思われる。

本稿が公刊される頃には，本震発生から約半年近くが経ち，日本の中では，ネパールでの大地震の記憶が薄れている時期かもしれない。このような時期に，本稿を通じ，今回の大地震をもう一度振り返っていただき，法整備支援の現場の様子を改めて感じていただければ幸いである。

---

[5] ネパール警察等の発表による。

[6] 1979 年，「カトマンズ盆地」（Kathmandu Valley）として世界文化遺産に登録。カトマンズ王宮広場（ダルバール広場）等の 7 つの寺院や史跡で構成。

カトマンズのダルバール広場には，主に 17 ～ 18 世紀の寺院が立ち並んでいるが，その一部は崩壊。世界遺産ではないが，カトマンズのランドマークであるビムセン塔（別名ダラハラ塔，高さ 52 m）も倒壊。

文化的建造物の防災については，「カトマンズの歴史都市における文化遺産の災害脆弱性に関する事例的研究」（『歴史都市防災論文集』Vol.4，板谷直子ほか，立命館大学歴史都市防災研究センター，2010 年）を参照。

[7] 「被害拡大するネパール大地震」（NHK「時論公論」2015.4.28 放送）。

この他，被害拡大の要因として，カトマンズ盆地の軟弱地盤を指摘するものもある（「2015 年ネパール地震のテクトニクスとカトマンズの極軟弱地盤」酒井治孝，日本地質学会ホームページ）。

[8] 新建物法はあったものの，運用面が不十分であったとの指摘がある（「THE DEADLY AFTERMATH IN NEPAL」（『TIME』2015.5.11 号）。

第２　現地の写真

１　いずれの写真も長期派遣専門家の皆さんが撮影したものである。

まずは，地震直後の街の様子を撮影したものを紹介したい。

レンガ造の商店や住居が大きく崩壊している様子がはっきりと分かる[9]。

[9] いずれもカトマンズ市内。

住居だけでなく，崩壊後の寺院[10]や倒壊防止措置中の建造物[11]などをみると，地震の大きさを改めて感じる。

[10] カトマンズ市内。最高裁判所から南へ約 1 km のタパタリ（Thapathali）地区にあるヒンズー教寺院。

[11] カトマンズ盆地内。カトマンズ市内から東へ約 12km のバクタプル（Bhaktapur）にある旧王宮広場（バクタプル・ダルバール広場 Durbar Square）付近。

配給を待つ列や屋外に並ぶテントを見ると，被災による日常生活の困難さが伝わってくる[12]。

[12] いずれもカトマンズ市内。

2　次に，司法関係として，カトマンズ市内にある最高裁判所の写真を何点か紹介したい。最高裁判所本館の壁面が剥離し，敷地を囲む塀が倒壊している。

最高裁判所本館は，館内の天井等に大きな亀裂が入るなどしており，調査の結果，倒壊の危険があるため，使用禁止となった。その代わりに，裁判官執務用のテントが敷地内に設置された。

※テント内の写真は，ネパール最高裁判所提供。

3　カトマンズ市内だけでなく，地方の裁判所も同様の被害を受けた。

カブレパランチョーク地方裁判所[13]の建物は，壁面に大きな亀裂が入ったため，使用禁止となり，裁判官執務用のテント[14]が屋外に設置された。

※上の写真は，地震前のもの。

[13] Kavrepalanchok 郡，ドゥリケル Dhulikhel 市内に所在。プロジェクトのモデルコートの１つ。同市は，カトマンズから東へ約 32km。ヒマラヤ山脈が一望できる峠がある古都。現在は，郡内の政治的中心地。

[14] 青いテントに書かれた文字は，中国語。「被災者を救う，災害救助」等の意味（日本語表記に置き換えると「救災」）。

4　山間部でも，家屋も崩れ落ちている。配給物資を待つ人々が車に集まっており，被災生活の大変さが改めて分かる[15]。

[15] カブレパランチョーク郡ナラ村（カトマンズから車で約1時間，バクタプールの北東）。ローカルNGOが村人に150人分の食料を届けたときの写真。この地域は，震災以前から，片道30分以上かけて山に水を汲みに行くような場所とのこと。

第３　現地の長期派遣専門家とのメール

実は,本震発生の前日(24 日)まで,プロジェクト関係者がネパールを訪問中であり,同日，長期派遣専門家やプロジェクト関係者が，日本側関係者とテレビ会議を実施した。

このときは,まさか翌日にこのような地震が起こるとは夢にも思っていなかったが,今考えると，もし本震が１日早く発生していたら…と思うと，背筋が寒くなる。

本震発生当日以降における長期派遣専門家とのやりとりは,別添２のとおりである。

安否確認から被災後の生活状況まで，現地の様子が実感できる貴重な内容である。これは，ひとえに，長期派遣専門家が精力的に各所を訪れて，実情の把握に尽力された賜物である。

第４　おわりに

今回の地震後，現地の長期派遣専門家やスタッフの皆さんと随時連絡が取れたことで，被災地の実情を詳しく知ることができた。非常時にあっても冷静に対処され，職務を遂行された現地の皆さんに心から敬意を表したい。

また，日本側の長期派遣専門家やスタッフだけでなく，ネパール側の司法関係者も無事であったとの報を受けた。これだけの被害の中においては，不幸中の幸いというべきであろう。ただ，他方で，多くの人々がその尊い命を奪われたことも忘れてはならず，亡くなられた方々に対しては，心から御冥福をお祈りしたい。

以上[16]

[16] ネパール全般についての情報は，各種ホームページや書籍に詳しいが，比較的入手しやすく，信頼性があるものをいくつか列挙する。

外務省ホームページ,『世界歴史叢書 ネパール全史』(佐伯和彦，明石書店，2003 年),『世界人権問題叢書 92 現代ネパールの政治と社会 ―民主化とマオイストの影響の拡大』(南真木人，石井溥･編，明石書店，2015 年),『ネパールを知るための 60 章』(社団法人日本ネパール協会編，明石書店，2000 年),『地球の歩き方 ネパールとヒマラヤトレッキング』(ダイヤモンド社)。

ネパールの法整備支援については，JICA や当部のホームページを参照。

（別添１）

ネパール元検事総長ユバラジ・サングローラ氏[1]からのメール（４月 28 日付け）

【原文】[2]

"Dear all

On Saturday, we, the faculties and staff, were in our next campus, a beautiful place located 35 KM out of kathmandu. The place is the top of a small hill.

We were busy planting saplings of fruit trees in the campus. It was a fun making event with work.

Suddenly, when we were eating lunch after a lot of works, experienced that the earth started shacking, and it was so intense that we could not stand up.

A small kitchen instantly broke and made our cook slightly hurt. Our newly under-construction buildings started shacking up and down. Nearby there were big trees and we suspected them fall on us. The cars were dancing.

I shouted to all to go in the mid of the ground. Then I sat down as I could not move. It was already one minute gone.

I stood up and saw far in other hills. They were full of dusts, as if there were countless of bomb blasts. I then realized that they were the hills where I repeatedly worked with my students.

All houses were broken. Many people died. Many animals died. I listen them calling me desperately asking for tents, medicines, and foods. We are doing as much is possible. We are collecting woods to burn the dead body. I never imagined that this kind of things could happen to poor innocent people.

The whole day yesterday spent visiting Bhaktapur[3], which is fully destroyed. Man bodies our under rubbles.

I inspired security personnel to work hard. They were working hard in such a danger.

Wrath quacks shocks continued the whole day yesterday and yo day morning. We risked to visit sites hit by the earthquakes. There were many bodies waiting for funereal. I was shocking to see children died and unearthed.

With too much pain

Yubaraj"

---

[1] Dr. Yubaraj Sangroula。2014 年夏，国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEI）での講義，最高検察庁での講演会のために来日。現在は，カトマンズ・ロースクール（Kathmandu School of Law）総長。

[2] 文面には，被災直後期ゆえの乱れもあるが，あえて原文ママにし，適宜，改行した。

[3] バクタプル。カトマンズの東方約 12km にある古都。氏の自宅や勤務先は，バクタプル近郊。

【日本語訳】[4]

皆さんへ

日曜日，私たち教授陣と職員は，カトマンズから35キロ離れた，小高い丘の上にある美しいキャンパス予定地にいました。私たちは，果樹の苗木をキャンパスに植えていました。忙しいながらも，楽しい作業でした。

作業後，昼食を取っていると，突然地面が揺れ出し，あまりにも強い揺れで立っていられなくなりました。小さなキッチンはたちまち壊れてしまい，私たちの料理人は軽傷を負いました。建設中の建物は大きく上下に揺れ，近くには大きな木がいくつかあり，私たちの上に倒れてこないかと心配になりました。自動車も踊るように揺れていました。

私は，皆にグラウンドの中央に向かうように叫びましたが，動けなくなり，座り込んでしまいました。すでに1分が経過していました。

立ち上がって他の丘を見渡すと，まるで無数の爆弾が炸裂したかのようにホコリが舞い上がっていました。そしてそれらの丘が，学生と共に何度も作業をした場所であることに気付いたのです。

家屋は全て破壊され，大勢の人々が亡くなりました。動物も多く死にました。私は，被災者たちがテントや医薬品，食料を求めて，必死に呼んでいる声を耳にしました。私たちはできる限りのことをしています。遺体を焼くための木材も集めています。これまで，何の罪もない貧しい人々にこのようなことが起こるとは想像だにしませんでした。

昨日は一日中，バクタプルを訪れました。バクタプルは，完全に破壊され，人々の遺体ががれきの下敷きになっていました。私は，治安要員に懸命に働くよう指示し，彼らはこんな危険な状況下でも懸命に働いていました。

地震の衝撃は，昨日一日中そして今朝も続きました。私たちは，危険を冒しながらも被災地を訪問し，多くの遺体が葬儀を待っているのを目にしました。私は，埋葬されていない子供たちの遺体を見て，大きな衝撃を受けました。

悲しみとともに

ユバラジ

[4] 一部意訳あり。

（別添２）

【４月 25 日（土）：地震発生当日】[1]

現地時間 11:56（日本時間 15:11），本震が発生。

その後，日本で地震報道があり，長期派遣専門家に安否を確認するメールを送信したところ，無事との返信があった。

〈受信時刻〉21:57　　〈送信者〉長期派遣専門家Ａさん

〈本文〉

ご連絡ありがとうございます。

私も他のみんなも，ともに無事です。

心配していただきありがとうございます。

****

【４月 26 日（日）：翌日】

昨日に引き続き，他の長期派遣専門家からも，無事との返信があった。

11:52　長期派遣専門家Ｂさん

大丈夫です。ご心配おかけしました。

12:18　長期派遣専門家Ｂさん

ネットが不通だったのですが，先ほどつながったので，確認できたメールには返信いたしました。

日本にいる家族には，昨日，地震直後，国際電話で安全を報告済みです。

12:26　長期派遣専門家Ｂさん

余震がたびたび起こります。

阪神大震災，東日本大震災の経験が生かせるように努めます。

またネットが不通になるかもしれないので，つながっているうちにいろいろ返信しておきたいと思います。

15:35　長期派遣専門家Ｄさん

JICA 事務所員は全員大丈夫です。

５月のミッション[2]については，後ほど所長と相談する予定です。

協議後，ご連絡させて頂きます。

****

---

[1] 特段の記載ない限り，日付は全て「平成 27 年（2015 年）」，時刻は「日本時間」（24 時間表記）。
メールは，プライバシーや読みやすさを考慮し，趣旨を変えない範囲で，表現を変更。

[2] 地震が発生しなければ，5 月 10 日から当部教官らプロジェクト関係者がネパールへ出張する予定であった。

【４月 27 日（月）：２日後】

プロジェクト・オフィスが入居する最高裁判所別館を訪問した際の状況や，被災生活の様子についてのメールが届いた。

13:51　長期派遣専門家Ｂさん

皆様

お疲れ様です。

先ほど最高裁に行ってまいりました。

事務官 10 名ほど，警察 10 名ほど来られておりました。

建物は損壊しておりませんでした。

我々のアネックス[3]を含め，建物全体が現在施錠されており，立ち入り禁止になっています。

キショールギミレ書記官（１２月研修参加者）がおられ，少し会話をしたのですが，最高裁職員は，無事とのことでした。

15:30　長期派遣専門家Ｂさん

水道，電気は，こちらは大丈夫です。

ミネラルウオーターは，４本ほど備蓄があります。

食料は，お店がほとんど閉まっている状態であり，空いている店があれば教えてください。

現在，一日一食ということで，備蓄の食糧を宿泊客で朝食だけ分け合っている状態です[4]。

あと数日は，それに加え，板チョコ１枚半，リッツクラッカー２袋の備蓄で過ごせるのではないかと思います。

最高裁のオフィスに４月訪問団[5]の皆さんがお土産でもってきてくれたお菓子が置いてあったと思ったので，それを食べに最高裁まで行ったのですが，あいにく建物は立ち入り禁止でした。

****

【４月 28 日（火）：３日後】

プロジェクト・オフィスの状況，市内の様子，避難状況について，詳しく記載されたメールが届いた。想像以上に過酷な状況である。

他方，カウンターパートの裁判官と会った際，情報収集するなど，困難な状況下でも，職務を遂行されている。

---

[3] プロジェクト・オフィスは，最高裁判所の別館（annex）に入居していた。地震後，最高裁判所は，耐震性に問題があって使用禁止となった本館の代わりに，別館を使用することにしたため，プロジェクト・オフィスは，カトマンズ市内のサンセットビュー・ホテルの一室に移転。

[4] 長期派遣専門家Ｂさんは，地震前からホテル暮らし。

[5] 地震発生前日まで，アドバイザリー・グループ（AG）委員の大学教授らプロジェクト関係者がネパールに滞在していた。

10:20　長期派遣専門家Ｄさん

皆様

お疲れ様です。返信が大変遅くなり申し訳ありません。

昨日，国連の勧告を受け，事務所建物[6]から避難し，一時的にエヴェレストホテル[7]が執務室となっています。

ネットにはアクセスできず，自宅は繋がったり切れたりという状況です。

16:28　長期派遣専門家Ｃさん

皆様

おつかれさまです。

本日 10 時過ぎ，自転車にて避難先の滞在場所から最高裁のプロジェクトオフィスの状況を確認しました。

警備員の話によれば，本館ビルは損傷があるが，JICA プロジェクトのオフィスのある別館は大丈夫とのことでした。

別館の建物の電気はありませんが，入り口から階段，そしてオフィス内部に特に大きな損傷は見られませんでした。

オフィスでは，キャビネットのドアが開いていたり，山積みの書籍が落下していましたが，コンピューターやプリンターは落下しておらず，だいじょうぶなようです。

二次災害にならないよう１分ほどでさっと確認しましたが，簡易修理した天井の小さい板が落下した他は，変化はありません。

拙いネパール語で警備員に確認したところ，裁判所の関係者は，本日まで出勤していないとのことです。

17:04　長期派遣専門家Ｂさん

お疲れ様です。

オフィスが開きましたか。

今日は雨が降ってきたので視察を切り上げ，早めに戻ってきましたが，明日もし晴れたらお菓子を食べに行きます（置いてありますよね？）。

今日は国立競技場[8]近くの売店が開いておりましたので，朝食のほか，サモサ[9]を食べることができました。

---

6 プロジェクト・オフィス（最高裁判所別館内）とは別に，JICA ネパール事務所がある。カトマンズ市内中心部から南に少し行ったパタンと呼ばれる地域にあった。歴史的建造物が崩壊したパタン・ダルバール広場（世界遺産）まで徒歩圏。

7 カトマンズ市内にあるホテルだが，震災直後から約２週間，ホテル内会議スペースを仮 JICA 事務所としていた。その後，別のホテルに移動して業務を継続していた際，同ホテルの耐震性に問題があることが判明し，同ホテルは閉鎖となった。

8 カトマンズ市内中心部にあり，最高裁判所の近く。

9 インドなどでもよく食べられている軽食。ゆでてつぶしたジャガイモなどの具材（香辛料で味付け）を小麦粉で作った薄い皮で三角形に包み，油で揚げたもの。

町の店舗もようやく後片付けのために従業員がこられている店が増え始め，大きな余震がなければ，数日中に営業を始めるお店も増えるのではないかと思います。

18:07　長期派遣専門家Ｃさん

皆様，こんにちは。

せっかく日本の緊急援助隊が先ほど現地に到着したはずなのに，カトマンズは午後からの雷雨でお出迎えです。

知っている限りでは，他の現地専門家は，前から住んでいるところにそのまま住み，私は，住んでいたマンション[10]が一部損壊したので，友人のところを転々としています。

家族がいること，義理の家族の面倒も見ないといけないので大人数になること，そして，お二人のところへ移動するのは，かなり距離があり，大変なので，特に相談していません。

公共の避難先である公園やフットサル場，お寺等ではなく，あくまで友人や知人のところ（ただし，彼らが昔住んでいたところなので，それほど快適ではありませんが，贅沢はいえません）を転々としています。

全て壊れた訳ではないのですが，壁にひびが少し入ったレベルではなく，厚い壁に大きな穴が開くほどの箇所が生じたことから，住民が不安になり，大きな余震があることから，その場を離れて知り合いのつてで寝る場所を探し回りました。

かなり大きな余震が初日から続いたため，荷物は車に積み，夜は屋外に大きなビニールシートを張り，毛布をかけて寝ました。

翌日は，夜遅くに雨が降りびしょ濡れになりながら，車に逃げ込み，夜を明かしました。

安全が確認できるまでは，落下や倒壊の危険があるため，貴重品やコンピューター，最低限の着替え，毛布，懐中電灯等を取りに，５分程度２回，家に戻っただけで，家を出ましたが，親戚，友人のネットワーク[11]があるため，食事（キャンプのように屋外で自炊）は，十分にとることができています。

現在は，元のマンションの近くの幼稚園（同じマンションで親しい友人が昔住んでいた家を貸しているところ）の部屋に，すし詰め状態で４家族２部屋を使用して滞在しています。

熟睡できないのでやや寝不足ですが，度重なる大きめの余震による精神的な緊張を除けば，体調は悪くないです。

小学校低学年の娘と１か月前に膝の手術をし，現在，松葉杖を突きながら歩く義理の父との移動は，それなりに大変です。

先ほど，やっとインド人エンジニアがマンションの簡易検査に来て，土台や支柱に大きなダメージは見られず，すぐに倒壊する危険はないとの結果が出たところですが、任期終了[12]までに再度居住することは無理だと思っています。

現在，ホテルもほぼ満室状態，地方から逃げてきた人，カトマンズでも家が倒壊した人々が

---

10 地上 11 階建ての高いマンションで，室内も含めて，かなりきれいで丈夫そうな建物。住宅街にあるが，付近でも群を抜いて高い建物。

11 Ｃさんの配偶者は，ネパール出身の方である。

12 長期派遣専門家３名とも，任期は 2015 年９月。

家を探している状況ですので，未だしばらく時間がかかりそうです。
カトマンズの街の状況は，昨日から余震が格段に減ったことで，商店も徐々に開きはじめ，交通量もかなり増えてきています。
子供が通うアメリカンスクールも，施設の安全性のチェックが終わるまで再開しないという連絡がありました。

18:40　長期派遣専門家Ａさん

ご連絡ありがとうございます。
私は現在，自宅に居ます。
しばらく電気及びネットが切断されていたのですが，少し前に電気も来て，ネット接続も繋がるようになりました。したがって、メールも見ることができています。

自宅前のスーパーが開き，食料品などを買い込むことができるようになりました。
急遽，ポテトチップスなどを買い込んだのですが，かじってみたら，かび臭く食べられたものではありませんでした。
普段見ることのない製品でしたので，この機会に売れなかった商品を在庫一掃処分しようとしているのではないかと思いました。
以上のように，買い込む商品の質には気をつける必要がありますが，買い物自体は出来る状態にあります。

20：37　長期派遣専門家Ａさん

先ほど最高裁判所に行ったのですが，偶然，庭先[13]で，最高裁長官，最高裁判事ら，最高裁の主要メンバーが会議をしていましたので，少しだけですが，お互いの安否・状況について情報交換を行うことが出来ました。
長官によると，最高裁本館は亀裂が激しく執務を行える状況にはないとのことで，当面の代替場所を探さなければならないとのことでした。
おそらくは，建て替えが必要となってくるだろうと思います。
また，代替場所が見つかるまでは，最高裁の機能はストップしてしまうだろうと思われます。
一方で，プロジェクト・オフィスの入っている別館の方は軽症でした。
参考までに後のメールで写真[14]を添付させていただきます。

****

【４月 29 日（水）：４日後】

昨夏（2014 年）のネパール共同研究（UNAFEI で実施）に参加したネパール研修員のうち数名から短信があり，みんな無事とのことであった。

もっとも，このうち１人は，地震当日から４夜連続で，家族と共にテント暮らしをして，今

---

13 最高裁の敷地には，駐車場や前庭スペースなどがあり，比較的開けた状態である。
14 写真は，前記「第２　現地の写真」のとおり。

日，久しぶりに自宅に戻ったとのことであった。

また，長期派遣専門家Aさんによると，最高裁事務総長，最高裁事務局長と話した際，現在，工事業者が最高裁の建物を検査中で，その結果，引き続き使用できるのか，建替えが必要なのかが決まるとのことであった。

****

【4月30日（木）：5日後】

JICA専門員（弁護士）を通じ，長期派遣専門家Cさんから，現地誌（日刊紙）の情報として，最高裁判所本館の耐震性に問題があることが分かった。

18:54　JICA専門員

昨日（4月29日），ネパールの建築物構造の専門家（国立トリブバン大学工学部[15]。建築物の建設許可等を行う政府機関である「バワン・ニルマン・ビバーグ」の専門家等）が確認したところ，倒壊の危険性があるため立入禁止を決定した。

状況は，1）建物が建っている地面に穴が開いている，2）建物の土台が割れている，3）敷地を囲む塀が壊れている。

カトマンズ，ラリトプール，バクタプール，ラスワ，ダーディン，ヌワコット，シンドパルチョーク，カブレ，ドラカの各裁判所[16]も倒壊の危険性があるとのこと。

17:58　長期派遣専門家Aさん

本日（4月30日），最高裁事務局長と面談を持ちました。

専門家チームが最高裁の本館を調査したところ，建物の継続使用は現状では不可能であるという調査結果が出ました。

そこで，最高裁としては，JICAプロジェクト・オフィスが入っている別館に本館の機能を当面の間，移転させるそうです。

そして，JICAプロジェクト・オフィス部屋を最高裁のスタッフが使用する必要があるため，空けてもらいたい旨の要請がありました。

最高裁の現在の状況を勘案すると，致し方ない要請であると思われるため，受けようと考えています。

したがって，JICAプロジェクトで新しい執務室を探す必要性が出てきています。

また，本日，司法省の面々及び最高裁事務局長ともお会いしました。

全員怪我なく無事でした。

---

[15] 同大学は，カトマンズにメインキャンパスがある総合大学。ネパール随一の名門大学。

[16] これらのうち，カトマンズ（Kathmandu），ラリトプール（Lalitpur），バクタプール（Bhaktapur），ラスワ（Rasuwa），ダーディン（Dhading），ヌワコット（Nuwakot），シンドパルチョーク（Sindhupalchowk），カブレ（Kavrepalanchowk）は，いずれも首都カトマンズと同じく，「バグマティ県」（Bagmati）に属する郡。ドラカ（Dolakha）は，バグマティ県の東隣の「ジャナクルプール県」（Janakpur）に属する郡。

これで最高裁・司法省の主要メンバーにつき，全員無事が確認されました。
****

【５月４日（月）：９日後】
プロジェクト・オフィスの明渡しや今後の調査団受入れの可否について話し合われており，地震後まだ１週間余だが，職務内容に関する議論が始まっているのは，驚きである。

20:42　長期派遣専門家Ｂさん
本日，プロジェクト・オフィスを最高裁執務室として使用するために，最高裁事務総長への明渡しが完了しました。
（プロジェクトの現地スタッフが立会。）

22:52　長期派遣専門家Ｃさん
調査団の受け入れに関しては，カトマンズでの安全な宿泊先の確保や移動の安全性や確実性，カトマンズにある最高裁との関係者との協議が実際にできるかどうか等，本来の目的を達成できるのかどうかの総合的な判断が必要のように思います。

現在，義理の姉の家に必要な荷物だけを運び，１か月半の期限付で生活しています。
まだ被災したマンションには，荷物が半分弱くらい残っています。
運転手の家が倒壊の危険で，本日（５月４日），カトマンズの役所（？）から，退避命令が出されたため，自分の車での移動はできません。
****

【５月７日（木）：12 日後】
JICA ネパール事務所やプロジェクト・オフィスが別のホテルに移転する予定との連絡があった。
****

【５月 12 日（火）：17 日後】
大きな余震が立て続けに発生したとの報道があったため，長期派遣専門家に安否を確認するメールを送信したところ，無事との返信があった。

17:54　長期派遣専門家Ｂさん
外出中でしたが大丈夫です。

長期派遣専門家Ａさん，Ｄさんも大丈夫です（Ｃさんは日本です[17]）。

18:06　長期派遣専門家Ａさん

ご連絡ありがとうございます。

プロジェクト・オフィスのスタッフ，Ｄさんともに無事が確認できています。

Ｂさんも無事で何よりです。

****

【５月 14 日（木）：19 日後（最大余震２日後）】

司法関係機関の建物の安全性について，詳細な連絡があった。

22:51　長期派遣専門家Ａさん

本日（５月 14 日），司法省に行き，次官と面会を持ちました。

次官によると，司法省の建物は無事だったが，最高裁や OAG[18]の研修を受け持つ NJA[19]及び地方のいくつかの裁判所の建物は，地震のダメージで崩壊の危険もしくは一部すでに崩落してしまっており，使用不可能となってしまったとのことでした。

（地震がネパールの祝日である土曜日に起きたことは本当に不幸中の幸いだったと思います。平日であれば，おそらく法曹関係者の被害も相当出ていたのではないかと推察されます。）

なお，カトマンズの司法省職員に被害はなかったそうです。

一方で，地方の法曹関係機関の職員の中には，亡くなった方も何人かいるとのことでした。

国会は閉鎖中であり，（日本が起草に関与した）民法の審議開始までにはまだ時間がかかりそうです。

****

【５月 15 日（金）：20 日後（３日後）】

検事総長府と最高裁判所の現状について連絡があった。

16:53　長期派遣専門家Ａさん

本日（５月 15 日），OAG に訪問し，検事総長，部長検事らと面談しました。

OAG の建物は，二度の地震で崩落の危険があるため使用はできず，職員は OAG の前の庭にテントを張り，そこで業務をこなしていました。

政府からは，３か月後の完成を目指してプレハブを作るということで，それまでは，最悪，テントで業務を継続することになるだろうとのことでした。

---

17 本震発生前から，５月に一時帰国する予定であったため。

18 検事総長府（Office of Government Attorney）。

19 国家司法学院（National Judicial Academy）。

ただし，OAG の前の庭はスペースが非常に限られており，またこれから雨季に入るため，業務に大きな支障を来すだろうと予想されます。

一方で，地方も含めて，検察関係者の犠牲は出なかったようです（１名，足を骨折したとのことでした)。
この点，非常に安心いたしました。

なお，その後，最高裁にも行きましたが，崩落の危険がある本館だけでなく，地震の専門家が安全を保証したはずの別館にも職員は入らずに，やはり庭で業務を行っていました（実際には，ほとんど業務らしきことはできていないように見受けられました)。
先日の大きな余震の影響もあり，建物の中に入る事自体，非常に不安で難しいようです。
****

【５月 18 日（月）: 23 日後（６日後)】
地方の裁判所の現状について連絡があった。

20:59　**長期派遣専門家Ａさん**
本日（５月 18 日)，カブレ地裁に行き，３人の判事と面談しました。

カブレ地域は，カトマンズよりも被害が大きかったと報道されているところであり，どの程度の被害があるか非常に心配していたのですが，町中の建物の多くが崩れているといったような印象は受けませんでした。
ただし，カブレ地裁の建物は，かなり亀裂が入ってしまっており，判事たちはテントを張り，そこで職務を行っていました。

判事によると，建物の専門家がチェックしたが，使用は不可能という判断をしたということでした。
私も内部を確認しましたが，とても使えるような状況ではないと感じました。
なお，新たな建物建設のめどは立っておらず，おそらく相当の間は，テントで業務をこなすことになるだろうと思われます。
私見ですが，以上の状況で，カブレ地裁をモデルコートとして引き続きプロジェクトに協力を求めるかについて，今後，慎重な判断が必要になってくるように思えます。
現地の状況について、写真[20]を添付させていただきます。
****

[20] 写真は，前記「第２　現地の写真」のとおり。

【5月19日（火）：24日後（7日後）】

日本ではなかなか接することができない報道内容を紹介しつつ，現状の報告があった。
また，JICA専門員（弁護士）からの質問について，現地の様子を回答している。

11:16　長期派遣専門家Ｃさん

カブレ地裁の写真を見ると，カブレ地裁の建物の被害は，私の住んでいたマンションの被害とほぼ同じ（我が家は，壁の一部が先の余震で崩落）か，少しましなようですが，このレベルの被害で余震が続くような状況では，室内で穏やかに仕事に集中することはできず，当然，屋外テントでの作業となるのが良く分かります。

参考までに，これまでの新聞報道で建物の再建や被害に関する記事をお知らせします。
なお，分野が異なるのですが，カトマンズ近郊で大きな被害のある郡では，地方の末端保健医療施設はほとんど壊滅状態のようです。

１）５月12日の大きな余震の前の記事ですが，５月９日付の現地の英字紙によると，被害を受けた建物は２年以内に立て直す計画のようです。
２）最高裁だけでなく，近くの官庁街であるシンハ・ダルバールの一部の建物も被害を受けており，省庁のいくつかは外部の建物や屋外で作業しているとのことです。

11:36　長期派遣専門家Ｃさん

３）５月８日時点での被害の大きかった郡別の死亡者数，負傷者数，倒壊家屋数を示すデータによると，カブレ郡は，この調査の時点で分かっているだけでも37.17%もの家屋が被害（亀裂や倒壊等，様々なケースを含むと考える）に遭っていることが分かります。
特に，街中よりも表街道から離れた村がひどいとの報道を見たことがあります（例えば，カブレの商業的中心地バネパ等ではなく，南部のパナウティやナモブッダ周辺等）。
カトマンズで得た市内の被害の情報から他の地域を推測すると，被災した多くの建物が，古いものや煉瓦を泥で固めた壁で作られた地方に集中しているのではないかと思います。
煉瓦でも泥ではなく，コンクリートで隙間固めた壁でしっかり作られた家屋は，比較的丈夫なようです。

17:50　長期派遣専門家Ａさん

・法廷もテントで行っているのか，まだそこまでに至っていないのか。
　→テントは３つあり，３人の裁判官が執務室兼法廷ということで使用していました。
　　先方によれば，一応，法廷事務も開始したということでしたが，実質的にどこまでできているかは不明です。
・事務作業，起案等で，PCなどは使えているのか。
　→裁判官の使用しているテントには，ノートパソコンが備え付けてありました。
　　一方で、事務の人がパソコンを使用している様子はありませんでした。

・電源はどうしているか。
→裁判所に電気自体は来ているので，そこからコードを引くなりして電源を確保していたかと思います。
・裁判記録，証拠書類等の管理，紛失・破損防止はどうしているか。
→記録の一部は，まだ建物の中にあると思います。
現在使用する必要がある記録は，外側に持ち出しており，必要に応じてテントに持ち込んで裁判官が確認していました。
震災により記録の破損，紛失が生じたということはないと思います。
・過去の記録，電子データは見ることはできるのか。
→必要な記録は，外に持ち出して，随時，見ると思います。
電子データは，裁判官の利用しているパソコンからは見ることができると思います。
・業務に関する当面の問題点。
→建物の再建築が未定の状態で，どのように雨季に対応するかだと思います。
外側に持ち出した記録を保管するテントみたいなものが必要になってくるかもしれません。
雨季に外で仕事をすることは難しいと思いますので，現在裁判官のみに割り当てられているテントを事務職員にも割り当てる必要があると思います。
裁判所の前のスペースも限られているので，その中で裁判所事務をどう割り振るかということも問題になってくると思います。
ちなみに，カブレ弁護士会の建物も使用できなくなってしまったので，これをどうするのかという問題もあります。
・カブレのテントは中国製のようですが，最高裁，カブレその他，他国からの支援を受けているのでしょうか。
→聞いたところ，ネパール政府から割り当てられたという話でした。
なお，カブレには，中国から大量のトラックが入っており，道路を埋め尽くしていました。

以　上